

奈良のむかし

第54話

奈良に古くから伝わる
むかしばなしをご紹介します。



頭塔のいわれ

文・山崎しげ子

東大寺の仁王門から南へ、飛火野を少し過ぎた西側に「頭塔」がある。東大寺の古い記録では、「神護景雲元年(767)、実忠が新薬師寺西野に塔一基造立奉る」とあり、これが「頭塔」に当たるといわれている。

さて、今回はこの「頭塔」にまつわる、実は、怖いお話。

*

昔、玄昉というお坊さんがいた。中国の唐で学問をおさめ、帰国後は僧侶の最高の位にもつた。その玄昉と、同じく唐で学んだ吉備真備らを、新しく政権の座に就いた橘諸兄が登用した。

ところで、橘諸兄の政敵、藤原一族の中の広嗣という人。自分が遠く九州の大宰府へ左遷されたのは玄昉らのせいと、玄昉らを除く反乱を起こしたが、敗れて斬殺された。広嗣の恨みは深かった。

さてさて、そんな中、こんどは玄昉が、九州へ遣わされた。建設中の

観世音寺完成のためだが、翌年、寺の完成後に当地で亡くなった。人々は乱暴者の広嗣の怨霊のしわざと噂した。お話はこうだ。

*

広嗣の怨霊は、雷となり、観世音寺の落慶法要の日、導師を勤めた生前の玄昉にとりついた。凄まじい雷鳴とともに黒雲の中に玄昉を掴み上げるや、奈良の都まで飛び、興福寺近くで投げ落とした。

体はバラバラになって飛び散り、頭、腕などが別々に落ちた。頭の落ちたところが、今の高畑町で、その頭を埋め、塔を建てて供養したのが「頭塔」だという。

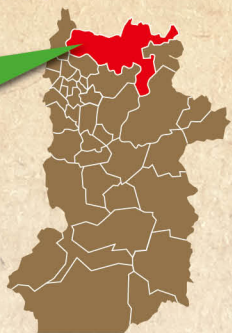
*

その「頭塔」。階段状の土の塔は、かつて「謎のピラミッド」と話題になった。木々が茂った小山は近所の子どもたちの遊び場だったというが、今は復原整備され、見学デッキや解説板も設けられて多くの見学者を迎えている。

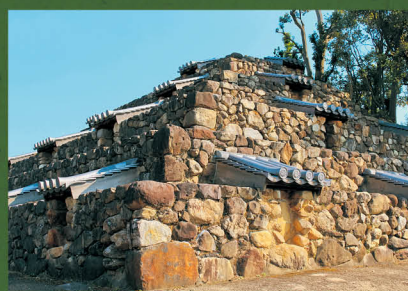
物語の場所を訪れよう

「頭塔」(奈良市高畑町)へは…

近鉄奈良駅またはJR奈良駅から奈良交通市内循環バス「破石町」下車すぐ



している。奇数段に確認された奈良時代後期の石仏のうち22基が国の重要文化財にも指定され、1基は郡山城の石垣に転用されている。
見学(有料)は、随時出来るが、毎年、春(ゴールデンウィーク)と、秋(正倉院展の期間)に特別公開期間が設けられ、観光ボランティアによる詳しい案内が聞ける。



頭塔(国指定史跡)

昭和61年から12年間に9次の発掘調査が行われ、1辺32mの石積基壇上に7段の階段状石積が築かれ、全体の高さは10mであることが判明

問 県文化財保存課 ☎0742-27-9866